平成３１年４月１７日（水）

老球の細道４７５号

全米大学バスケットボール（ＮＣＡＡ）終了

会津バスケットボール協会　　室　井　富　仁

「Ｍａｒｃｈ　Ｍａｄｎｅｓｓ（３月の狂気）」と呼ばれ、ＮＢＡと並ぶ人気を誇る全米大学バスケットボールＮＣＡＡトーナメントが終了した。ファイナル４には、バージニア大学、テキサス工科大学、ミシガン州立大学、オーバン大学が残り、バージニア大学が決勝戦でテキサス工科大学を延長戦で破り初優勝した。

バージニア大学のヘッドコーチはトニー・ベネット。ハリウッドの俳優のようなマスクで冷静沈着なベンチワークが光っていた。彼のお父さんはかつて、ウイスコシン大学（トステインロイブルのクリニック通訳をしている本永氏の出身校）のヘッドコーチを務めファイナル４に導いた。お姉さんは、私が会津高校時代アメリカ遠征の拠点にしたエバンズビル大学のヘッドコーチ、キャシー・ベネット（現インデイアナ大学Ｈ・Ｃ）だ。父姉共にテレビに映り、とてもなつかしく拝見した。トニー・ベネットは今後アメリカ大学コーチの注目株になるだろう。

ここ数年ＮＣＡＡトーナメントは、アメリカのテレビ局が放映権を独占していたので、日本でのテレビ観戦はできなかった。しかし、八村塁がゴンザガ大学で活躍するようになったので「楽天ＴＶ」がゴンザガ大学のスイート１６（３回戦）から放映してくれた。残念ながらゴンザガはエリート８（準々決勝）でテキサスに負けてしまったが、楽天ＴＶはその後も決勝戦まで放映してくれて感謝、感激、雨あられだった。

久しぶりに見たＮＣＡＡトーナメントだったが、会場のすさまじい熱気は「マーチ・マッドネス」と言われるにふさわしく、ファイナル４の試合会場は６万６千人収容のアメリカンフットボールで使われる「ミネアポリスＵＳバンクスタジアム」で行われた。会場はほぼ満員だった。日本では同じころＢリーグの千葉ジェッツ対三河の観客数が約６千人。

桁違いの観客数や試合会場のみならず、プレイやゲーム内容もすばらしかった。昔のＮＢＡのようにただ大きくてインサイドだけという選手は皆無で、大きくても外からも打てる、デイフェンスもしつこく頑張れる、リバウンドには死に物狂いで跳びつくプレイが随所に見られた。世界はオールラウンドプレイヤーの時代か。どの試合も接戦になっていたが、勝敗を分けたのはやはりシュート力であった。特にどのチームもエースと言われる選手が、必ずここぞという時の１本をゴールに沈める。この勝負強さのメンタルがどれほど強いのか驚くばかりであった。

いつも思うことであるが、このようなゲームを会津地区の子ども達、指導者の方はどれくらい見ているのだろう。通信機器の発達によって、昔のようにわざわざアメリカまで行ってＮＢＡやＮＣＡＡを観戦しなくても、ちょっとお金を出せばネット配信で見れる時代である。世界のトップレベルを目に焼き付けながら練習するのと、自チームの仲間やコーチだけのプレイを真似して練習するのとでは、その差ははかり知れないだろう。

暇にかまけてテレビで録画しておいたＮＢＡをはじめ色々なゲームを毎日１試合見ることをノルマにしている。時間がない時は１クオーターと３，４クオーターの必殺飛ばし見をする。そのようにして年々進化するバスケットボールのプレイやスキルに対する感性を養いたいと思っているが多すぎて見切れない。恵まれた時代になったものだ。